

# 中世港湾都市今津と桑原別所

吉留秀敏（福岡市教育委員会）

## 発表要旨

福岡市西区大字桑原に所在する元岡・桑原遺跡群第 18 次発掘調査地点において、特殊な中世遺構群を発見した。これらが中世山岳寺院に伴う僧坊群と類似することを明らかにした。遺跡の主要遺構は 12～14 世紀であり、考古学的成果を中心に地誌、文献、伝承などの検討を踏まえて、遺跡を含む本地域がこの時期、安楽寺領桑原庄であることから、荘園領主により配置された「別所」であろうと推察した。すでに刊行した調査報告書に記した部分もあるが、ここではその形態や構成を改めて紹介すると共に、その後の検討も加えて、その成立と変遷の背景についての私見を述べたい。

## 1. はじめに

福岡市西区に所在する元岡・桑原遺跡群は、旧石器時代から中世に及ぶ集落や墳墓、また製鉄や水田などの生産遺跡をも含む大規模な複合遺跡である。この遺跡群は玄界灘に突出した糸島半島の基部に位置し、福岡市西区大字元岡と同大字桑原にまたがる丘陵地帯に分布する多くの遺跡の総称である。遺跡の立地する丘陵は第三紀後葉に形成された花崗岩を基盤とし、高さは標高 100m 前後を頂部として樹枝状の浸食谷が地形を複雑にしている。糸島半島の東～南側は現在広い水田耕地となっているが、古代から中世までは今津湾が深く入り込み、海岸は遺跡近くまで迫っていた。現在見られる状況は、古墳時代以降の急速な埋積と、近世以降の干拓事業により陸化したものである。本遺跡群の発掘調査は 2010

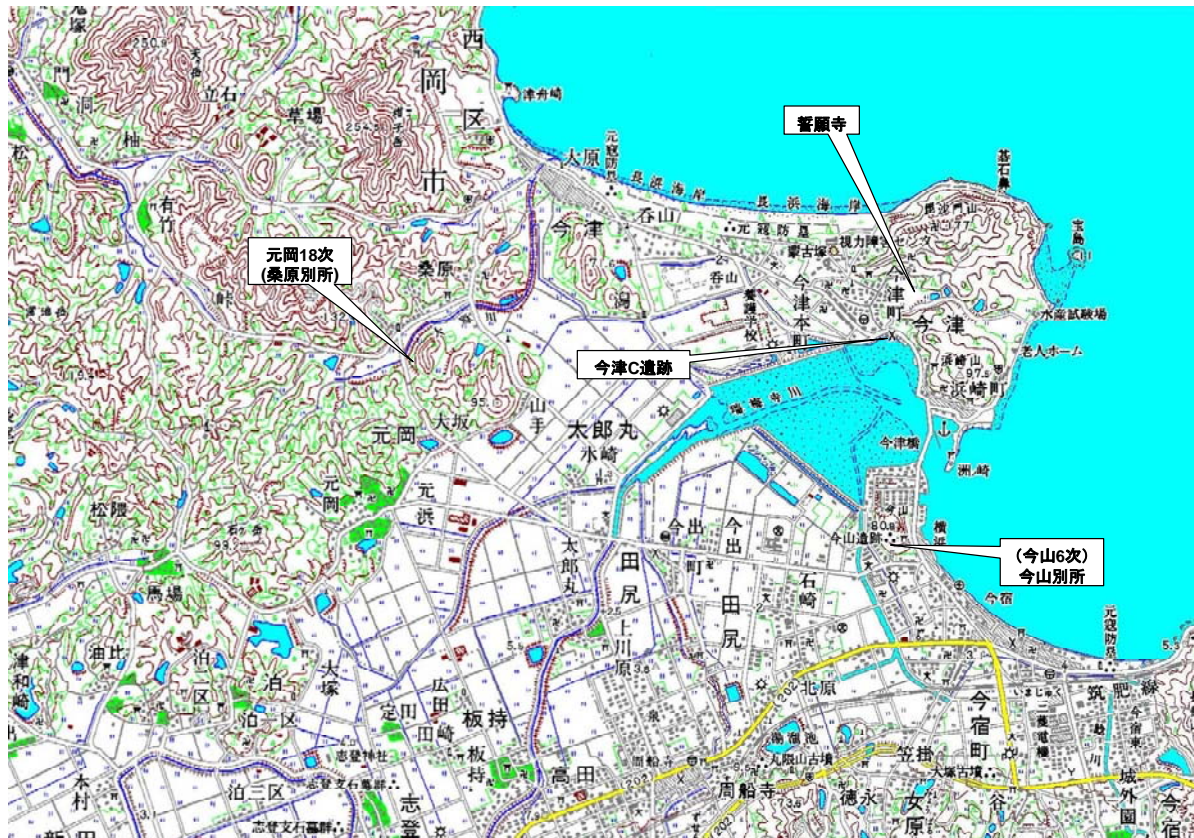


Fig.1 元岡桑原遺跡群18次調査地点(桑原別所)と周辺の関連遺跡

年までに 55 次に及んでいる。このうち第 18 次発掘調査地点（以下では「18 次地点」と略する）は、福岡市西区大字桑原字別府に所在し、1999～2002 年に発掘調査を行った。この 18 次地点は、大原（幸）川の南岸にあり、北西に開口する狭い谷地形である。遺跡のすぐ東側は柑子岳の支城とされる中世山城の戸山城があり、その山麓斜面を含んでいる。現在の桑原集落の川を挟んで南側に位置する。

## 2. 元岡・桑原遺跡群 18 次調査の概要

発掘調査は平成 11 (1999) 年 10 月 10 日から、平成 14 (2002) 2 月 15 日に実施した。18 次地点は、丘陵を横断し桑原と元岡の両地区を結ぶ幹線道路（県道桜井太郎丸線）沿いにあり、水崎山から北に派生する二つの尾根に挟まれた谷地内にある。谷地は幅約 100m、奥行き約 300m を測る。その標高は 12～46m であり、上流に従い急斜面となる。この谷地には戦前から昭和 40 年頃までは谷水田と棚田がつくられていた。その後斜面の棚田は造成工事を経て蜜柑園が開かれている。昭和 60 年以降に蜜柑園は中止され、小面積の水田と畑地が残り、周囲は竹林と雑木林となっていた。地域住民の話ではこの谷に戦前より遡って民家（農家）が存在したことは聞かないという。なお、昭和 60 年代は、西側の県道に沿った水田は埋め立てられ民家と農業用倉庫などが建てられた。移転用地として土地取得後は、建物などが撤去され、農地も放置されたために調査開始まで著しい荒地であった。調査が進むと遺跡は未確認の地下 5m 以下の谷底や急斜面の上部まで及び、谷部中央では 5 面の遺構面を検出した。本稿で示す中世遺構面は、このうち第 2 面に該当する。

## 3. 調査地点の位置と環境

元岡桑原遺跡群では、弥生時代以降の各調査地点から、農業、漁業関連遺物と共に朝鮮半島や国内各地

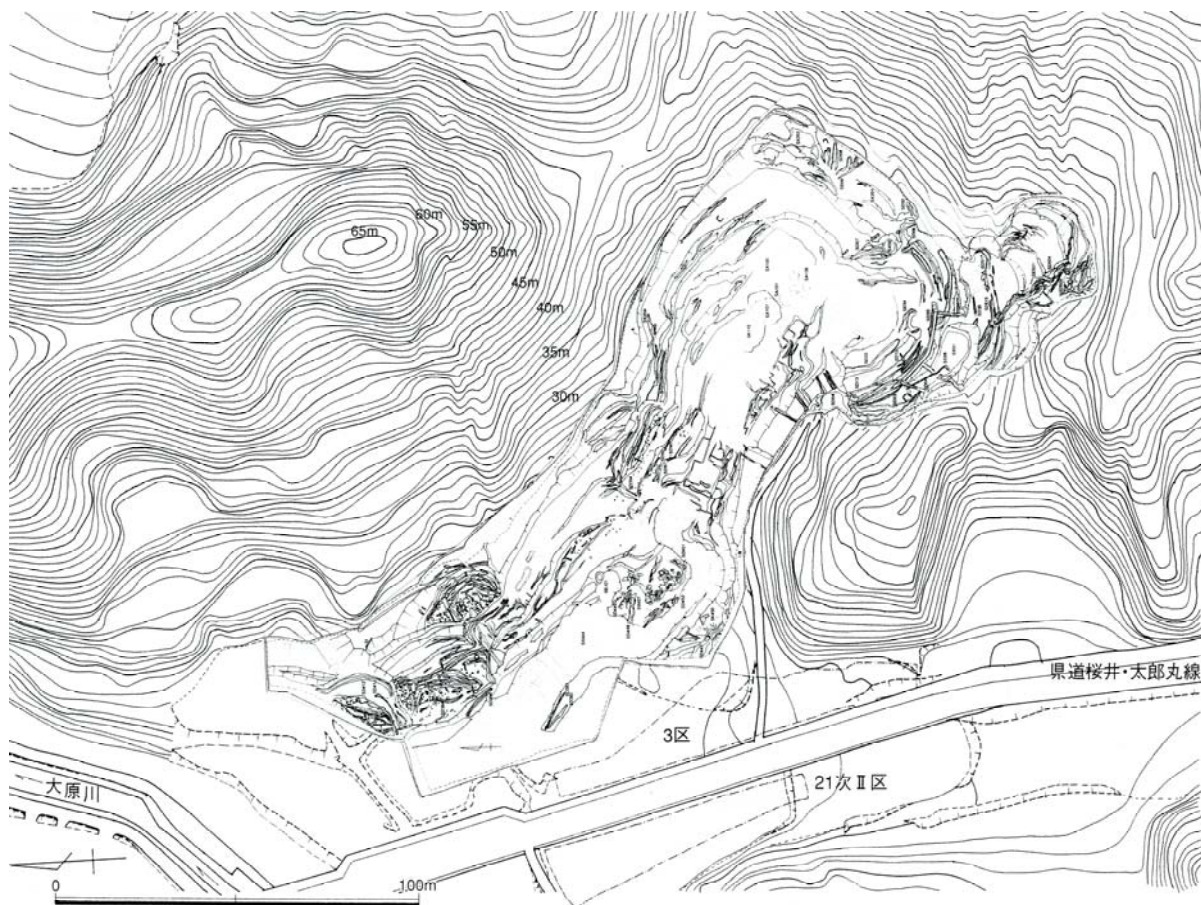


Fig. 18次地点の位置と周辺地形

との交易を示す土器、陶質土器や金属器類、玉類が多く出土する。本地域の集団が海外を含む広範囲な交易にも従事していた事が予測されている。

古代には、糸島半島は嶋（志麻）郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、加夜、志麻、鶏永の八郷に分かれていたが、本遺跡群が該当する郷は現時点では不明である。古代末にはこの地域は安楽寺領桑原庄となる。『安楽寺草創日記』では康和二(1100)年に荘園領地三十町を寄進したとの記載が見られる。中世になると本地域には、志摩郡、伊都郡を中心に広大な荘園を形成する法金剛院領怡土庄が成立する。

今津湾は多くの貿易船が出入りする外港として平安時代末になると著しく栄えている。「今津」の名称も、博多津に対しての、新たな今の「津」と呼ばれたことから生まれた地名とも言われている。今津のおもな港湾施設は湾西側の毘沙門山南麓にあり、現在の今津本町から浜崎町付近の海浜部と考えられる。今津湾から南宋に二度渡海した禅僧栄西が関わる誓願寺は、現在も当地に所在している。また周辺には勝福寺や今津古墓など日宋貿易に関わる寺社や遺跡が多く分布する。平安時代末から中世にはこれらの寺社を中心に貿易の富に恵まれ、港湾部の集落は「今津千軒」と呼ばれるほど発展していたとされる。残念ながらこの一帯の考古学的、文献史的調査は進んでいない。考古学的調査としては、誓願寺に隣接する今津B遺跡で、山麓斜面に僧坊に関わる遺構群が発見された。また海浜部の今津C遺跡では、海浜の砂丘上に礎石建物や瓦、輸入陶磁器などが多く発見されている。18次地点はこの今津港の西方約3.5kmに位置している。本遺跡が展開する戸山南西斜面から今津港は、山陰となり直接には眺望できない。しかし、その後中世山城となった戸山山頂（標高72m）まで登ると、今津港全体を遠望することができる。また、大原川への流路付け替え以前の幸川は今津湾に注いでおり、川沿いに下るならば小舟などで短時間に直接連絡できる位置にあった。

近世に入ると今津は糸島地域の年貢積出港など廻船業を主とする浦分となり、その後再び漁業が主体となり、港としては衰退の途を辿る。寛文5（1665）年からは今津湾の干拓が開始されることになる。

#### 4. 18次地点周辺の地名、伝承事項

地籍字名をみるとこの谷は大字桑原字別府と記されている。しかし、この谷は地元の古老に何うと古くから「ベッショ」、「ベツ」などと呼んでおり、「ベツ」とは呼ばないという。桑原村出身の方からも、この谷の耕地を「ベツ畑」と呼んでいたと伺った。谷の東側にある小山は中世後期の山城「戸山城」と称されるが、字境でもあり別名「別所城」と称される。こうした「別府」と「別所」の違いは、ある時期に地籍図上での記載や転記ミスにより生じたものか、あるいは「ベッショ」が小字以下の名称であるのからとも考えられる。しかし、何れも検証困難であり現時点ではその判断はできない。

またこの谷の南東側の県道桜井太郎丸線の隣接地には、調査以前に直径5mほどの小規模の塚状の高まりがあり、自然石の石塔1基と、老木が1本立っていた。ここについては桑原地区では「ガランドウサマ」と呼ばれ、ある種の信仰対象とされていた。「ガランドウ」の名称の由来については、「伽藍堂」もしくは、「加羅（唐）堂」などの仏教関連や、あるいは音響に関わる「ガラン洞」などが想定される。この点についても聞き取りを行ったが、残念ながら何らの言い伝えもなく不明であった。また、18次地点の桜井太郎丸線を隔てて南西側の丘陵は「ボウズヤマ」と呼ばれている。古墳時代の石ヶ元古墳群の分布範囲であり、何らかの関連があるかもしれない。

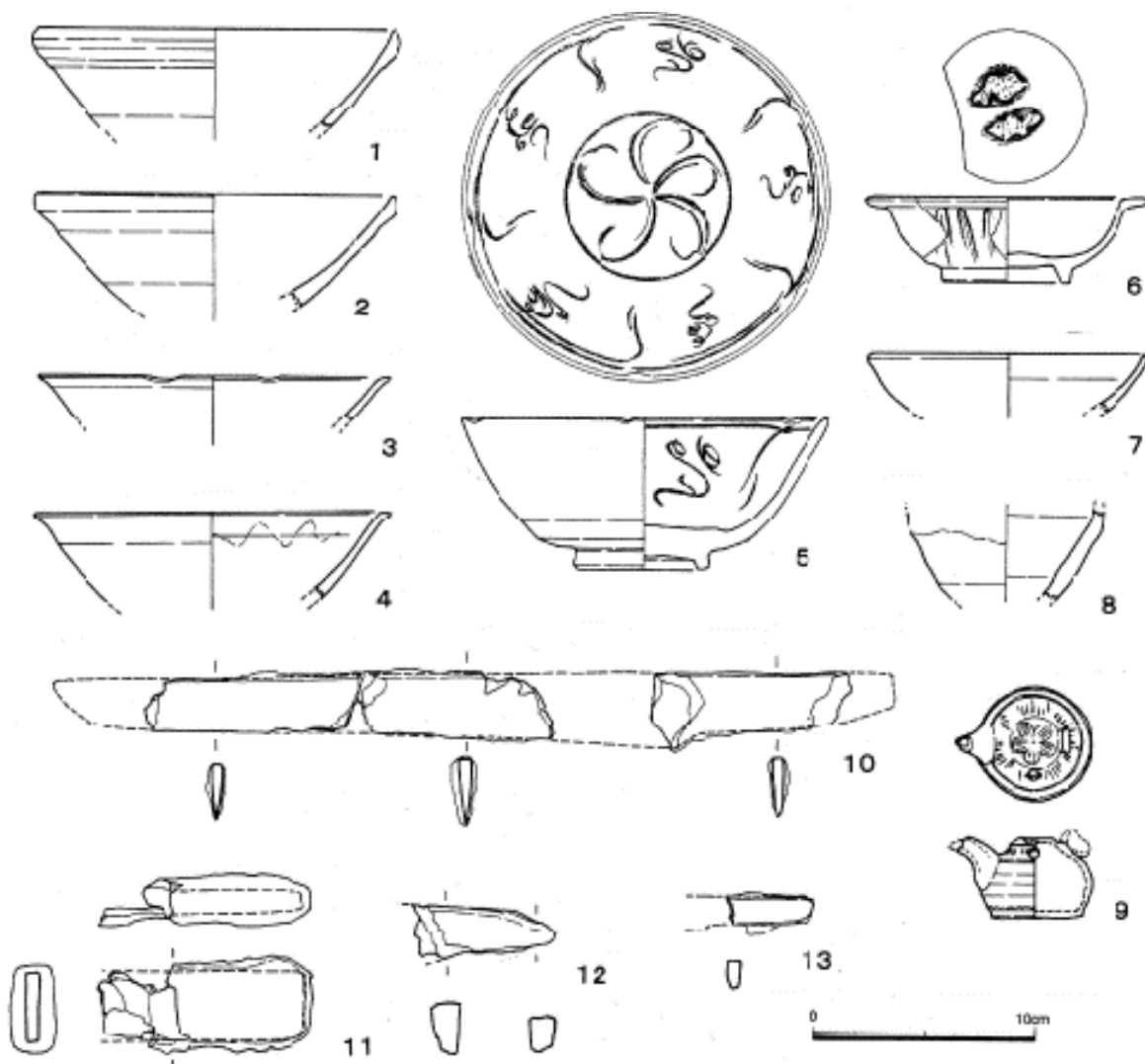
#### 5. 検出遺構の概要

18次地点の中世遺構には、テラス（造成面）遺構、掘立柱建物、井戸、木棺墓、土坑、溝、井戸、溜井、水田面などがある。建物などは谷開口部付近斜面に展開している。建物群直下の谷部では杭列などがあり、水田が存在したと考えられる。また上流域には建物はないが、水田や溜池などが分布している。

（詳細は略す）

## 6. 主な出土遺物 (Fig.3)

本遺跡からは土師器類、輸入陶磁器類、国産陶器、石鍋、鉄製品などがある。全体としての特徴は、土師器類を上回る量の圧倒的な各種の輸入陶磁器類である。土師器類には椀、坏、皿、鍋鉢、三脚鉢などがある。坏、皿類はへら切りと、糸切り後板圧痕を残すものがある。輸入陶磁器類には、白磁、青磁、青白磁、陶器などがある。白磁には椀、皿、水滴などがある。白磁椀(1~4)はIV類を主とする。白磁水滴(9)は頂部に五輪の花文を付する小型優品であり、底面には薄い染み状の墨痕がみられる。青磁には龍泉窯系と同安窯系があり、椀、皿、双魚文鉢、壺などがある(5~7)。青白磁には合子もしくは壺蓋等がある。陶器には天目茶碗(8)、褐釉陶四耳壺などがある。国産陶器には東播系片口鉢がある。出土状況は、テラス面や建物柱穴からは龍泉窯系、同安窯系青磁が多く出土し、斜面や谷部の包含層からは白磁、龍泉窯系I、II類が多く出土した。また、陶器壺や青磁皿の見込みには墨書の認められるものが数点存在するが、破片のため判読できない。



1~4: 白磁(谷部包含層出土) 5: 龍泉窯系青磁(テラス1出土) 6: 龍泉窯系青磁双魚文皿(テラス1後背溝出土) 7: 青磁小椀(石組井戸 SE421 出土) 8: 天目椀(石組井戸 SE421 出土) 9: 白磁水注(谷部包含層出土) 10: 鉄刀(テラス2井戸排水溝 SX390 出土) 11: 鉄刀柄部(溝SD12 出土) 12・13: 刀子柄部(谷部包含層出土)

Fig. 3 主な出土遺物

石鍋は谷部包含層出土で、石材の優品が多く、全て口縁部直下に鏢状突帯が巡るものである。

鉄器には刀、鋤先や刀子、鉄釘などがある。出土した刀は2点ある (Fig.3-10、11)。10 は小刀であり、先端と刃部と基部を欠損し、全体は不明であるが、刃部幅 1.5～2.5cm、柄部幅 2cm で推定長は 38cm と復元される。11 は刀の柄部破片である。破損が著しいが、現存する柄部の長さ 9.5cm、幅 3cm であり、刃部は不明であるが、全長 50cm 以上と推定される。

個別遺構の年代を知れるものは少ないが、総じて白磁類、土師器を主とする 11 世紀後半から 12 世紀代の資料を初現とし、その後龍泉窯系と同安窯系の青磁を主とする 13～14 世紀代を中心とする様相への変化が認められる。本遺跡では 16 世紀以降の中世末の資料が僅かに出土するが、両者には時期の断絶があり、東側の戸山城関連遺構からの出土品を含むことから、連続しないと考えられる。

## 7. まとめ

### (1) 18 次地点の中世集落の変遷と様相

18 次地点では、古代末から中世に開墾された小規模な水田と、それに関わるとみられる集落が発見された。集落は同じ谷に面する東側斜面にあり、3 段に区分造成されたテラス面に設けられていた。テラス上での建造物はすべて掘立柱建物であり、確認できた建物数は多くない。しかし、各テラスで柱穴にも多数の切り合いがあり、同時期には少数の建物で構成されていた事がわかる。建物の規模にはおおきく二間三間と、一間二間の二種類があり、それぞれのテラスやテラス上の区画内ではこの二種が同時期に 1 セット存在するとみられた。それぞれが一単位であるならば二間三間の建物が母屋で、一間二間の建物が脇屋としての性格を有しているかも知れない。なお、テラスのなかでテラス 2 の施設面積や建物規模が他よりやや大きく、全体として最も長期間利用されている。また、テラス群の中心的位置に配置していることと考えあわせると、この集落の代表者の居住域とも予測される。ただし、それらの建物規模の較差は小さく、突出した存在とは考え難い。何れにせよ、テラスごとの施設は単純であり、小規模であることも共通している。同時期の福岡、早良平野等の一般集落に比べても規模が極めて小さく特異である。またそれぞれのテラス面が独自の区画と排水溝、井戸や集水槽などの水源が配置されていることと、それぞれの単位が区画溝や崖、視覚の及ばない段差などで独立性をもっていることなど、特殊性が強いことが把握される。

出土遺物を見ると、鎌、鋤類の農耕具があるものの、刀や豊富な輸入陶磁器類があり、とくに白磁水滴や天目茶碗などは一般集落では認め難いものである。単に農耕集落として評価するには問題が多い。このようにテラスでの集落は、小さな母屋と脇屋を基本単位とし、またそれぞれのテラスで複数回の建て替えがあった。関連すると見られる谷水田は 5～6 回の、水口、導水路の改修や田面拡大などが行われていた。本集落は、出土遺物から平安時代末から鎌倉時代の 250～300 年間の継続が推定される。

さて、調査されたこのテラス群のあるのは、戸山城西麓斜面である。調査範囲より上方は現在山林であるが、調査した以外に比高差数十mの範囲に十箇所前後の平坦面 (テラス) が点在する (Fig. 2)。踏査を行ったが、何れも個々にはさほど大きな面積ではなく、テラス 1, 2 と同規模の規模である。これらは保存地区であり未調査であるが、上方からテラス 1 覆土中に流入した可能性のある出土遺物に龍泉窯系青磁などがあり、18 次地点と同様のテラス遺構が存在すると考えられる。このようにテラスを設け展開する集落群が、谷開口部に近い戸山南西斜面に上下に数十mの比高差をもつ立体的な景観で集中分布していることになる。

### (2) 「別所」と筑前におけるその特質について

高木豊氏(1991)によると、「別所」とは寺域内の空閑地、領主のない空閑地など未開発の地を占定し、その造成された宗教施設であるという。それには地子・地利・官物・雑役・公事などの免除の特権が

与えられ、それが別所在住者やその活動の経済的基盤にもなった。その初見は11世紀前半に遡るが、中世後期になるとその造成もみられなくなり末寺化していった。別所には特定寺院を離去した僧や、寺院の中心的事業から離れた僧が在住して、遁世・隠栖の場とした一方、聖も在住・寄住して、自行・化他の生活をしている。別所の宗教活動としては、迎講・不断念仏・法華八講・般若講・仁王講などがあり、別所周辺の人々はこの講会に結縁したり、忌日仏事を委託したりして、別所は在地の人々の教化・結縁の場であったという。他方、菊池山哉氏は早く古代東北地域の資料を検討し、別所が蝦夷対策により生じた俘囚の移配地との説を示した。また柴田弘武氏はこの説を評価しながら、全国に621箇所の「別所」地名を収集し、俘囚移配の目的が製鉄を主とした金属生産に関わる集団の形成にあったとの見解を示した(柴田2007)。これまで「別所」については、このように大きく二つの見解がある。

筑前地域には複数の「別所」地名が存在する。史料に記された「別所」としては、大宰府宝満山西麓の竈門山寺の山桃別所(『拾遺往生伝』)や、箱崎宮関連の今山別所(『金剛界大灌頂随要私記』)などがある。竈門山寺は鎌倉期には有智山寺とも称され、その所在する宝満山山麓では、近年の発掘調査で12世紀を初現とし、13世紀後半～14世紀をピークとする大小の雛壇状の平坦面、掘立柱建物、柵、石垣、石段、スロープ、庭園などが確認されている。これらは寺院に関わる坊跡と推定されている(山村2005)。また、地名のみの遺存例としては糟屋郡(現久山町)に2カ所、筑紫郡(現那珂川町)に1カ所の「別所」がある。このように18次地点を含め、筑前地域に6箇所の「別所」が存在する。

このうち今山別所は18次地点と同じ糸島地域で、今津湾岸の今山付近に所在したと推定する。今山は西区横浜2丁目に所在する。今山は鮮新世後半に形成された標高82mの独立した玄武岩火山体である。前記『私記』には、「承安3(1173)年癸巳5月27日於箱崎宮今山別所之僧坊 入唐聖人葉上御房御本書了 池上闇梨御選」とある。今山別所に僧坊が存在し、今津に滞在していた入唐僧「葉上御房(栄西の諡)」との関わりがあったことがわかる。今山遺跡では1996年の7次調査で、今山南麓部から12～13世紀を主とし、14世紀を下限とする輸入陶磁器類や土師器、石鍋、鍛冶製鉄関連遺物がまともって出土した(米倉編1998)。また、1999～2000年の8次調査では今山東麓の旧横浜村内の砂丘上に10世紀前半～中頃の石垣、堀割状の施設が発見され、「南…」との墨書がある木簡、土器類、瓦などが出土した。そして、この堀割の埋没土上部から12世紀代の陶磁器類が出土している(米倉編2005)。調査担当者は石垣と堀割を船舶用ドックと推定したが、石垣の延長方向の北西約30mには(箱崎)八幡社の境内が広がる。大正期にこの境内を造成し鉄道と道路が敷設された。この石垣はかつての八幡社域東側と集落部との境界にほぼ一致する。何れにせよ今山遺跡においてこれらの古代中頃から中世期の遺物は、今山の南斜面から南東山麓にかけて出土している。この今山南斜面は全山のなかでも比較的傾斜が緩い範囲である。現在、山頂からこの南斜面にかけては、熊野神社を始め白髭明神、観音堂、八大龍王(鳴神岩)などの祠や磐座などの宗教施設が多数分布している。そして、この南斜面の各所には、僧坊跡を想定できるテラス状の平坦面が残存している。著者はこれらの考古学的成果と現地踏査からみた諸要素、そして先の文献に現れる年代が重複することから、この付近が古代末から中世期に存在した今山別所の比定地と考えている。

また、糟屋郡(現久山町)首羅山(白山)の「別所」は、糟屋郡久山町白山(289m)を中心とする修験道関連の遺構群のなかにあり、本谷、西山、別所などの大規模な僧坊群の一つとして知られている(江上編2010)。平安時代後期以降に北部九州では禅宗の拡大と共に山岳修行を旨とした修験道が盛行するが、豊前の英彦山、求菩提山、筑前の宝満山、背振山、そしてこの首羅山は、全国的にもみても大規模で多くの衆徒と僧坊が知られている。この首羅山別所は未調査であるものの、これまでの踏査などで位置はほぼ特定されている。本所である西山と山一つ超えた位置にあり、小河川から分岐した支谷を中心に展開している。僧坊の数については、近世に記された貝原益見の『筑前国続風土記』等によれば、本谷100坊、西山100坊、山王100坊、別所60坊の計350坊があったとされる(野中2008)。

また、那珂川町の別所は、青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』によれば、修験道に関わる中心的寺院である東門寺の別所と推定されている。かつて背振山を中心に展開した「背振千坊」と呼ばれた大規模僧坊群の一面をなすものである。

#### (4) 桑原「別所」の成立と展開

18次地点を含む桑原地域は大原(幸)川に沿って東西に狭長な平野であり、平安後期には寄進地系荘園として、安楽寺領桑原庄となる。先述の『安楽寺草創日記』の康和2年(1100)以降は、『木屋文書』正平11年(1356)や、『大宰府天満宮文書』亨録3年(1560)などにも安楽寺所領として桑原庄が記されていることから、安楽寺領として継続していたことが分かる。正木喜三郎氏は、この桑原庄と隣接する板持庄は今津湾岸の安楽寺領荘園であり、海外貿易や港湾との繋がりが多く、地理的特徴をよく示すという。安楽寺領支配形態としては、初期は在地領主に依存し、やがて在地領主制の進展・押妨に対応して寺僧らが下級荘官職を併有して下地進止権の掌握を計り、一元的所領形成を進めたとみる(正木2005)。

またこの地域は古代末から中世に海外貿易を中心に著しく発展する今津港の隣接地域でもある。今津の誓願寺は、安元元(1175)年に怡土の在地豪族であった仲原太子が発願し、僧寛智により建立されたとされる。この誓願寺は最盛期に子院42坊を誇ったとされ、現在の誓願寺周辺の字名にも寺小路、大日坊、坊頭正権院などが確認されている。ただし中世末には勢力は衰えて12坊に縮小し、大泉坊、龍性院、阿弥陀堂、薬師堂、白山権現などが存在したと『筑前続風土記付録』に記されている。

1985年に行われた今津B遺跡1次調査は、誓願寺周辺の数少ない発掘調査であるが、毘沙門山南麓斜面の3箇所造成テラス面と溝、建物、柱穴、井戸などが確認されている(二宮編1987)。まず造成されたテラスには、斜面側に「コの字」形の排水溝が設けられている。また排水溝と連結する集水槽や隣接箇所に井戸を設けている。そしてテラス上には小規模な建物などがあり、A区の1号井戸からは瓦類が出土していることから、一部には瓦葺き建物も存在したと考えられる。これらの遺構は出土した輸入陶磁器類の年代観から13~14世紀と考えられている。このようにそれぞれのテラス面が独自の区画と排水、水源、小規模の建物を配置している状況が伺われる。テラス面の個々がそれぞれ僧坊の一単位を示しているとも考えられる。誓願寺の後背部にあたる毘沙門山南斜面の山林や、山裾の棚田付近には、現在なお多数の平坦面が存在しており、42坊と称された未確認の多くの子院(僧坊)跡が埋もれていると予測される。さて、18次地点のテラス群を改めて見ると、この誓願寺の僧坊跡の形態や規模・構造が酷似していることに気づく。また、推定時期も重複している。

平安後期に成立した安楽寺領桑原庄は地理的に見て、現在の大原川流域の桑原の谷地に限定され、この18次地点を含め、同様な複数の支流(小谷)を包括するものと考えられる。康和二(1100)年には、荘園領地として三十町が記録されている。ちなみに、この大原川は、中世~近世初期の干拓以前の河口部が、字「深田」、「立浦」付近に想定されている。また上流域は近代に設けられた溜池「平川池」付近で谷が複数に分岐し、何れの支谷でも著しい狭田となる。この分岐地点に近い2次、15次地点で発見した中世初期の水田面は、大原川添いの低位段丘面を小区画の水田化したものである。このうち15次地点は、11~12世紀において川から約20mまでの狭い範囲が水田化されていた。これが当時の水田開発域の最上流部に近い様相と見られた。河口部からこの地点までの距離は約1.5km、沖積地の平均幅は約200mであり、面積にするとおおよそ30町歩である。多少の支谷への開発があるとしても、康和年間の水田域はおおよそこの範囲を中心としていたと考えられるだろう。

こうした桑原庄全域の中でこの18次地点の谷部の水田域は、全体の百分の一以下の面積に過ぎず、また生産性の著しく悪い土地であった。テラス群による居住形態は本地域における僧坊遺構と共通していることから見て、桑原庄の経営に関わる寺僧の一部に、庄域内のこの未墾地を「別所」として与えて住ませ、僅かな農耕生産物を糧としながら、新たな活動の拠点とさせたと思われるであろう。このよ

うな「別所」僧坊群は、14～15世紀以降に中世寺院や伽藍僧坊に関連して形成される大規模僧坊群（高橋2007）にも類似するが、より小規模であり、先行して出現している。

さて、この桑原「別所」が、単に僧侶たちの遁世・隠栖や終焉の場としての利用だとすると、交通の要所に近いその立地条件や、生産性の低い農地にも拘わらず貴重品を含む豊富な輸入陶磁器類や武器などの出土品に違和感をもたざるを得ない。とくに墨書土器や天目茶碗、白磁水滴、刀などの存在から、近くの今津港での貿易活動に関わり、茶を嗜み、書を認める人々（寺僧）の存在が想定されよう。また、一部に武装した人々（僧兵）も含まれていることが予測できる。

今津港のごく近隣に、港湾部を囲み異なる寺社による今山と桑原という2つの別所が同時期に設けられ、港湾都市今津の発展や終焉に連動していることは重要である。また、両別所は何れも今津から直接見通せない山陰に造られているが、テラス群の上部からほど近い今山、戸山のそれぞれの山頂に立てば、逆に今津の旧港湾部が一望できることや、今津港へは小舟などを利用して容易く接近できる点も偶然の選地とは考え難いのである。平安時代末に新たに台頭してきた港湾都市今津の発展は、近隣の荘園領主たる寺社にもその貿易の富や利権に関わり、介入するための新たな動きを生じさせたと考えられる。ここに示した2つの別所はその役割の一部を担って配置されたと見るべきであろう。その活動は僧兵の配置を行いつつ、今津港を介して各々寺社の経営する船舶や宋商船等の入出港に関わりながらも、港湾地域の多様な活動に及んでいたのではなかろうか。もちろん別所や寺僧の具体的な活動内容まで検討できる資料や史料は現時点で確認できていない。これは今後の課題となろう。

18次地点の中世遺構群を「別所」と仮定してその検討を行ったが、一つの素案としての提示であり、批判を仰ぎたい。考古、文献資料の取扱いや、地名考証などに様々な問題を含んでいる。文中で示した幾つかの問題点と併せて今後の検討課題としておきたい。

本稿作成において、18次調査、報告書作成段階を通じてご教示を頂き、またさまざまな討議に応じて頂いた同僚の職員、調査員の諸氏に感謝したい。また、芳名を記す事はできないが、農作業中など多忙な中で、迷惑な聞き取りに応じて頂いた福岡市西区桑原、横浜の皆様に厚く御礼を申し上げたい。

## 参考文献

- 池崎譲二 2004「第4次調査の記録」『元岡・桑原遺跡群3—第3・8・11次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集 福岡市教育委員会
- 江上智恵編 2010『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町文化財調査報告第15集 久山町教育委員会
- 江上智恵編 2008『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会
- 佐藤一郎 1991「今津C遺跡1次（IMC-1）」『福岡市文化財年報VOL.4』 福岡市教育委員会
- 柴田弘武 2007『全国「別所」地名辞典』 彩流社
- 高木 豊 1991「別所」『国史大事典』 吉川弘文館
- 高橋慎一郎 2007「中世寺院における僧坊の展開」『中世寺院 暴力と景観』 高志書院
- 二宮忠司編 1987『板屋・今津遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第166集 福岡市教育委員会
- 正木喜三郎 2005「怡土荘」『講座日本荘園史10』 吉川弘文館
- 服部秀雄編 1999『筑前国怡土庄故地現地調査速報』地域資料叢書4 九州大学比較社会文化研究科服部秀雄研究室
- 山村信榮 2005「大宰府の中世寺院と都市」『中世の都市と寺院』 高志書院
- 米倉秀紀編 1998『今山遺跡—第7次調査の報告』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集 福岡市教育委員会
- 米倉秀紀編 2005『今山遺跡—第8次調査—』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集 福岡市教育委員会
- 吉留秀敏「第18次調査の記録」『元岡・桑原遺跡群14—第12・18・20次調査の報告（下）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1063集 福岡市教育委員会
- 元岡村誌編纂委員会編 1961『元岡村誌』